



TITLE:

冒頭発言 2

AUTHOR(S):

富山, 一郎

CITATION:

富山, 一郎. 冒頭発言 2. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1997, 28: 3-5

ISSUE DATE:

1997-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187658>

RIGHT:

反しているにも関わらず、資本主義的なハビタスの強要という点では同じであり、開発過程における共犯関係にあることを見出しうると思います。

さらに、もう一つ検討を要する問題も明確になってきました。それは、これまで示してきた開発言説と主体化の問題を前提として、そのような開発過程で生起する個々の開発実践が、どのような形で地域、国家、世界システムの運動と連関するかという問題です。私は文化人類学を専攻しているので、村や地域レベルの動きと、それを超えた動きとの関係がとくに気になります。いずれにせよ、これらの間の接合過程をどのように理解するのかが、更なる課題であるということです。

しかし、これらの難しい課題を一挙に解決することはできません。そのため、これらの課題に切り込む一つの方法として、同じく公募研究班の富山さんから、オリエンタリズムと開発という問題を設定してはどうか、という提案がなされました。確かに、このオリエンタリズムという枠組みは、上記の課題であった開発言説のみならず、開発現象の民族誌やハビタス・レベルの分析にまで貫通する問題であります。そこで今回の研究会では、「他者」やオリエンタリズムの問題を追求してきた富山さんに、オリエンタリズムとの関係で開発が議論できるように、報告者の方々の組織化をお願いした次第であります。

ですから次に、富山さんから、富山さんの問題意識との関わりで冒頭発言をおこなっていただきたいと思います。

冒頭発言 2

富山 一郎

この「『開発』とオリエンタリズム」という研究会をもとうと思った論点といえますか、私自身の問題設定について少しお話ししたいと思います。「オリエンタリズム」ということばからも当然わかるように、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」という議論を、この研究会の一つの題目である「開発」、あるいは「固有の発展」ということばに関わる議論の中で設定しうるのかどうか、という問題があります。そこでは「オリエンタリズム」という議論がひとえにコロニアリズムという議論と対応して出されていることから

もわかるように、植民地主義という議論が今日においてどこまで設定しうるのか、という問題意識があります。しかしながらここでは従来のように、植民地主義の搾取だとか抑圧といった議論を並べ立てることは、あまり考えていません。ポイントは三つあります。

一つは確かに、コロナリズムの議論の中で、支配する側・される側という議論、あるいはそれをもう少し包括するような議論はあるかと思いますが、それと同時に考えなくてはならないのは、いったいそのコロナリズム／オリエンタリズムという議論において、あるいはその中で「開発」を語るときに、どこから発話するのか、という問題であります。つまり、どういう枠組みでそれを問題とするのか、ということが一つのポイントです。そこには、我々が科学として、あるいは分析として議論するときに、はたしてオリエンタリズムなりコロナリズムという領域とは独自の領域として、はじめから枠組みがあるとたてていいのか、ということがポイントです。他者にしろ独立にしろ革命にしろ、いったいどこから語るのか、という議論をしてみたい。当然それは我々の属している学自体の批判的検討というものが含まれる、ということでもあります。

二点目は、その学自身の批判的検討ということとも関わるのですが、非常に乱暴に言えば、学の中でオリエンタリズムに関わる議論として、二つほど類型があるように私には思えます。つまりそれは、「認識する学」と、ある一定の合目的性をもった、例えば開発経済学のような「目的性をもった学」の二つです。前者の一つの典型としては、例えば人類学がそうであります。従来、このような学の検討を行った際には、人類学は人類学、経済学は経済学という形でなされていたと思うのですが、私はこのような分類の仕方自体がまた問題であると思います。つまり、認識の学としてさしあたり人類学をたてた時点ですである種のものが忘れ去られるだろうし、またある種の方向性を打ち出すべきものとしての学として、経済学を設定した時点でまたある種のものが失われるだろう。この辺を一度柔軟に捉えてみたい、と思うわけです。つまり、人類学の中にも開発経済学的なところはあるし、開発経済学の中にも認識を指定していくようなところはある、ということです。

そして三点目は、一点目とも関係しますが、このような議論はある意味では言葉のやりとり、ディスカール分析のような議論になってしまうかと思います。そういうふうに緻密に議論を打ち立てていくことも大切なんです、ここにいらっしゃる方々は相当フィールドワークに携わっていらっしゃると思います。ここで三点目の論点として、確かに「現場に行けば何でもわかる」という議論はもう卒業したいわけなんです、やはりディスカール分析だけではなく、再び現場性といいますか、そういう問題を設定できないだろうか、

というのが三つ目のポイントです。やはり言葉だけで「開発」が構成されて話が終わりというのではなく、また、これは行けばいいということでもないんですが、言葉だけには還元できないようなもの、そういう意味では人類学という領域は、私は批判もするし期待もしている領域でなんですが、このような問題にむきあう場として再び現場性というものを設定できないか。このことを三つ目の論点として考えてみたいと思っています。

以上、三つの思いがあってこの研究会をやろうということであります。